住井すゑとその文学の里（二十三）

ー牛久沼のほとりー

牛久市文化財保護審議委員
栗原 功

権藤成卿・武者小路実篤・風見章・犬田卯・橘孝三郎・今東光

―彼らが農本主義団体『日本村治派同盟』を結成―

明治時代の中期に幸徳秋水らが『原始回帰』思想を唱えて体制批判（既存の国家体制を否定してその打破を目指すこと）を行った。

原始回帰思想とは、『国家の体制の根幹を原始時代における農業中心に回帰』させることを目指すものであった。

この原始回帰思想による体制批判は、大正から昭和にかけては権藤成卿や橘孝三郎らによって展開されていた。

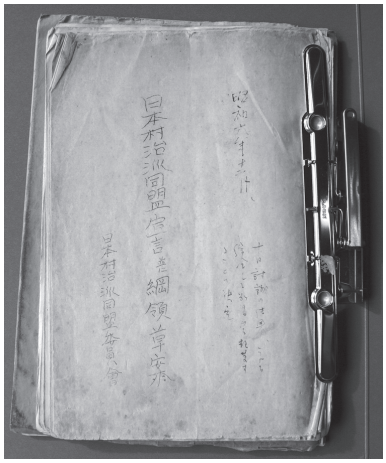
橘孝三郎は現在の水戸市の出身で、農本主義者であった。農本主義とは、農業および農村社会を国の本とする考え方だ。

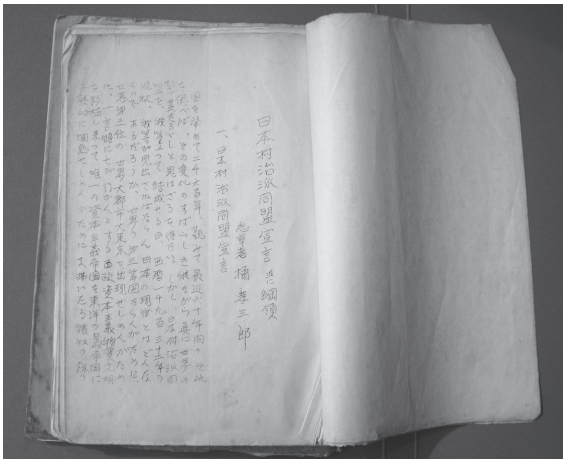
橘の原始回帰思想と農本主義は、農民農地農村の解放を目指す犬田卯と共通する部分があった。

農村恐慌の中で昭和6年（1931年）に入ると、農本主義論者の間で、大同団結の気運が大いに高まった。彼らは、同年11月に東京・神田区の一ッ橋教育会館において、日本村治派同盟の第1回創立発起人会を開催し、宣言文、標語、規約、行動、綱領の決議を行った。発起人は、農民自治会の下中弥三郎、大地に立つ社の加藤一夫、農村共働学校の岡本利吉、後で農民協議会を作った長野朗、法政大学教授で農学博士の小野武夫、『文明の没落』『土に還へる』の著者室伏高信、東京農業大学教授沢田五郎、今関寿暦、高須芳次郎、辻潤、土田杏村、津田光造、口田康信、矢部周、古谷栄一、江原源九郎、雨谷菊夫、宮越信一郎、山川時郎、村井弘侑、自治学会の権藤成卿、新しき村創設者で作家の武者小路実篤、全国農民芸術連盟の犬田卯、今東光（春聴）、後で代議士になった森田重次郎、愛郷塾塾主橘孝三郎、代議士風見章の27人であった。風見章は茨城県豊田郡水海道駅3番地（現常総市）の出身。風見と犬田は同郷の好で、犬田は風見章の『章』をもらって長男に命名した。風見は後に第一次近衛内閣の書記官長（現在の官房長官にあたる）、第二次近衛内閣の司法相を歴任した。書記官長時代の風見は、背広の腰に汚れた手拭いをぶら下げて歩くような、素朴で飾らない人柄が親しみを持たれ『野人翰長（書記官長を指す）』と呼ばれて、近衛内閣の一躍人気者となった。

『日本村治派同盟』は、当時中国で推進されていた郷村建設運動を模範にした団体で、杉山元治郎らがこれより少し前の大正11年（1922年）に創立した左翼系の日本農民組合とは、基本理念および活動方向が全く異なっていた。

その日本村治派同盟の加盟者の顔ぶれは、農本主義者、思想家、評論家、学者、作家、代議士などで、各々の主義主張には、もとより大きな相違があった。例えば、森田重次郎は『吾等日本民族は天皇を中心として一団となり…』と言うのに対して、犬田卯は『われわれは支配搾取なき国際的協同自治社会の建設を目的とする』ときっぱり言い切っていたのだ。





「日本村治派同盟行動綱領原案」
橘孝三郎が書いた。
―犬田家保存―